

合理性とは形而上の話である

函館市医師会
函館五稜郭病院

にしもと たけふみ
西本 武史

先日、ヤボ用で名古屋の駅西に3泊ほど滞在した。名古屋めしの鉄板ナポリタンを食べ、ホテルに戻る途中、辻説法していたあやしい女性が叫んでいたのが見出しである。

「名古屋の辻説法は難しいことを言うなあ…」とそのときは苦笑しただけだったが、後日、函館に戻り、ある患者から近い医療者への苦情を耳にして、あらためて見出しについて考えた。

「先生にとってはたくさんいる患者の一人でも、私たちにとってはたった一人の家族です！」みたいなことは、皆さんも一度はぶつけられたことがあるのではないだろうか。愚生もそんな患者・家族からみれば傍若無人な医療者の一人だったと反省しているが、あることを始めたのをきっかけに、お互い共感し合えるコミュニケーションがとれるようになってきた。

あることとは、イイ歳をして始めた大学・看護学校の講師と臨床研究である。昨今、数多の論文がpublishされ、ありとあらゆるガイドラインが整備され、様々な試験と資格が乱立している。教育と研究を行うには、これらにかなりしっかりcommitしていなければ、査読で突っ込まれるし、学生は国試に落ちるので、こちらも自ずと勉強することとなる（さらに〇〇長ともなると病院の機能維持・向上のため資格の取得・更新もたいへんなのだ！）。すると今度は逆に既存の情報どおりにはいかない臨床経験をjする。患者は一人一人違うんだなあ…と今さらながら気づく。

患者が一人一人違うことに気づくと、生来凝り性なので丁寧に見所をとったり、検査をしたりして違いをみつけようとする。しつこいやつだと思われたくないのj、コミュニケーションも工夫する。薬も一人一人考えて処方するので、説明にも熱が入るし、違いに気づくにはとにかく情報共有が大切なので、指示出しも病棟スタッフと齟齬がないようにする。

気づいたら患者・家族に随分なつかれるようになった。

論文・ガイドライン・専門医…合理的に医療を施すには不可欠だが、それだけで最善の医療が行えるjと考えるのは見出しのとおり机上の空論だろう。患者一人一人の違いに気づき、先回りして対処することは予防・軽症化につながるし、それによって成功体験を患者と共有することでより強固な治療同盟が生まれる。医療も人（医療者）と人（患者）とが出

会って初めて始まるわけだから、恋愛や育児と同じように、実は一番遠回りなやり方がベストアンサーということもあるような気がする。

「合理性とは形而上の話である」

今度、名古屋を訪れた際は、もう少しゆっくり辻説法に耳を傾けてみようか…。



患者さんが描き置きしていった愚生のイラスト



文中に出てくる鉄板ナポリタン